

編集後記

この学会誌の編集委員を拝命してからもう5年が過ぎた。ある学会誌の編集委員を勤めるということは結構大変なことである。投稿してくる先生は臨床的研究であれ、基礎的研究であれ、それぞれの研究を一生懸命やり、色々な意味での期待をこめて投稿してくるわけであるから、その採否の判断に関しては編集委員あるいは査読者は全力をあげて慎重、かつ公正、厳格に取り組まなければならないし、勿論私も今までもそうしてきたつもりである。

私は本誌の他にいくつかの雑誌の編集委員を仰せつかっており、その中には外国の雑誌の Associate Editor Japan という立場もある。この Associate Editor の仕事はかなり大変である。日本の office 宛に投稿された論文の review を外国の referee にも依頼しているが、彼等の態度は誠に立派である。まず多くの referee が、現在 communication の手段が早くなった恩恵を受けての上であるが、査読結果を驚く程の早さで返送してくる。それは研究成果を公表することにおける priority を尊重するという態度の延長上にあるものと考えられる。また chief editor からの返事によく登場する文章として“Every effort will be made to expedite the review process”というのがある。この文章に接するたびに review process を自分のところで滞らせてはいけないう大きなプレッシャーを感じている。さらに外国の referee の返事で感心させられることは彼等が referee としての機会を与えられたことを大変誇りに思っているということである。“Let me thank you for the privilege to review this article.”などという文章が必ずといって良いほど、査読結果の最後に書いてある。つまり彼等にとって peer review の member として選ばれたことは大変名誉なことであり、誇るべきことであるということである。

ひるがえって本誌の編集委員としての自分を考えると、やはり若い先生方の興味ある研究にいち早く接することができ、しかもそれについての意見を述べ、そのある部分については著者と communication が出来るということは大きな特権であり名誉でありそしてそれは重大な責任を伴っていると感じている。

(平澤博之)